

# 懐かしい空母葛城

郷 芳美

私は、昭和十九年五月十五日付で、佐世保市相浦海兵団に入団した師範学校出身者二百余名の、十一教班に配分され構成された分隊で、師徴分隊と言われた、その四期生であった。同年の九月まで、三か月の訓練を終えて、乗艦を心待ちにしていたある日、防空壕掘りをしていた時、急に集合が掛かり、四列横隊に並べられて、五番までは軍艦何々、次十番までは軍艦何々と、希望を言えば乗艦の変更はできたが、半強制的にそれぞれ乗艦を命ぜられ、その時点で各自の運命は決まったようなものであった。

私は九月二十七日付で、呉湾で擬装中で進水間近の空母葛城かつらぎに乗艦を命ぜられ、第二分隊の三連装機銃分隊に配属された。乗艦してみると、中は何百本もの水道管や電機その他の鉛管等が通路に縦横に敷設されていて、混雑して足の踏み場もないくらいであった。十月十五日に竣工し、翌年四月初旬頃まで、熾烈極まりない冬季超酷寒の会場で、実戦に備えての昼夜を分かたぬ超猛訓練に明け暮れていた。呉湾内や、瀬戸内海における鋼鉄板上の生活は、身を切る思いの連続であった。朝食前の黎明訓練、機銃を覆っているカチカチのおおいを、素手で取り払い、そして三連装の機銃操作訓練、中良し（私は真ん中の射手であった）、右良し、左良し……。指揮者の「撃てー」と、気魄のこもった戦友同志の気脈通ずる、気合溢れる操作訓練で、火花を散らすような夜明前の、早朝の厳しい訓練であった。そして、午前も訓練、午後は整備その他の作業、夜食後の夜間訓練、これが終わると、寒風吹き荒ぶ艦上で、その日の反省、良いところは一つもなく、悪いことばかり何項目も、厳しい説教が続き、罰則として「前へ支え」。この罰則は軽いほうで、何か重要な過失があると、「今日は何も言わない」と、きたら、尻へのバスターである。この反省が終わると寝に就くが、新兵の仕事はまだあって、うつぶん晴らしに洗面器を叩いて寝るのが夜更けであった。毎日雑多の仕事があり、少しでもぼんやりして突っ立っていると、「何をぼやぼやしているか」と、くるから、一本のハンマーを持って、何か用ある如く、通路をさも忙しそうに、行ったり来たり、くるくる走り廻っていたものである。

しかし若者の男所帯であったから、他愛のないいたずらもあった。よく酒保開けの夜は、みんな酒を飲んで、リラックスの夜であった。巡検後、酩酊したおえら方の航海長が、兵員の室に来て、疲れて寝ている兵員のハンモックの下に立ち、君が代を歌

いながら、徐々にハンモックをつるしたひもを解いていって、最後にストーンと寝ている兵士を落として、みんな大笑いをするという、上官と兵士の仲の良さ、睦まじさがあり、ほほ笑ましい情景は、まだ他にもあった。

三月十九日は、忘れもしない第一回目の呉湾に集結していた艦船をめがけた呉空襲であった。わが空母葛城は擬装して島に見せかけ、甲板上に家を建て、種々の木を植え、道路を造り、草で甲板を覆い、舷側に割った竹などを並べて、巧妙に島のようにカムフラージュしていたので、前半は攻撃はなかったが、後半には見破られて攻撃を受け、私は上甲板の左舷の中間より数十メートル後方の、単装機銃で応戦し、江田島方向から飛んでくる敵機を射撃し、近くの海面に小型爆弾が何発も落下して、水柱が何回も上がり、何回か艦が揺れて、鉄かぶとの頭を壁に打ちつけたことを憶えている。断続五梯団の空襲で約三時間位かの戦闘であったが、幸いに無事であった。三月二十六日、戦艦大和が呉港を出撃したのを、手あきの兵は上甲板にাগり帽振れをして見送ったことを憶えている。

四月初旬の頃であったろうか。ある日班長が総兵員を集めて、いよいよ本艦も出撃することになった。それぞれの家族と連絡を取り、最後の面会しておくようにとの、出撃の指示があった。私も家族と連絡して、某日の夕方呉駅前の旅館で、予定どおり、父親と会い、父が田舎で飼っていた蜂蜜を、割った孟宗竹の中に入れて持ってきたものや、母が作ったばた餅などを食べて、翌日駅頭で別れたのである。帰艦してみるとびっくりした、どんな風の吹きまわしであろうか、出撃は中止されたということであった。

それから、二、三週間後の頃である。某日、班長から兵員集合がかかり、第二回目の出撃行が決まったとのことで、今度は前よりも緊張して、家族に連絡したところ、今度は母が最後の面会に来ることになった。某日の早朝に、母は言われたとおり呉駅に着き、出撃する息子とのこの世の最後の面会を果たすべく、呉駅頭に立って、私に会いにくるのを今か今かと、待ちあぐねている筈であった。母は旅行の経験もなく、前日鹿児島田舎から、博多、広島、呉へと、一人で他の人へ乗り換え等を聞きながら、会いたい一念で、ようやく辿り着いていたのである。

ところが運悪く、私は日程が変更になり、翌朝出撃のため、早朝から弾薬搭載の仕事を一月中しなければならなくなったのである。母はそれとも知らず、言われたとおりあの雑踏する駅頭に立って、朝から夕方まで十時間立ちつくしていなければ、なら

なくなった。その弾薬搭載というのは、呉駅の前面に見える江田島のある島の山腹に造られた巨大な火薬庫から、噴進砲弾、大砲弾、25ミリ機銃弾等を肩にかついで、ランチが待っている波止場まで運搬し、沖にいる母艦の弾火薬庫に積みこむ作業である。山腹の火薬庫から波止場まで、五百メートルほどの距離があり、その途中で下士官らが精神注入棒を持って、それ往けそれ走れと気合を入れて、運搬作業を督励しているのである。沖に停艦している母艦まで、何回も運び、はしごを伝って甲板に上げ、またはしごを何回も伝って、母艦の中央にある弾火薬庫まで納める作業が続き、搭載が終了したのは漸く午後四時頃であったと思う。

早速一泊の外泊許可が出て、跳ぶような気持ちで呉駅に向かった。駅では当時何千人とも知れない海軍将校が昇降していて、繁雑を極めていた。その行き交う駅頭で、十時間も待ち通した母とようやく会えて、やおら立ち上がり、満面の笑みを浮かべて迎えた母の姿が、今も私の眼に焼きついていて離れない。幾千言を尽くしても表現できない、心と心をつないだ、戦場へ向かわんとする息子と母の我ながら、崇高な母子の真情であった。しばらくして駅を離れて下宿に着き、母が作ってきた餅や、父の蜂蜜等を食べながら話していたが、昼間の疲れが出て眠くなり、話すことができなくなつて寝てしまったのである。いよいよ出撃の朝となり、母と連れだつて、厳しい門兵が二人して向かい合つて立つ団門まで行き、ここまでと母を納得させて、帰りに母の後姿を見送つたのであった。ところが、母艦に帰ってみると、はからずも何と、二回目の出撃行も中止となつていたのである。

どんな上層部の判断があつたのか、下級兵の我らには知る由もないことである。その頃は、どこに出撃するのか分からなかったが、最近読んだ「日本の航空母艦パーフェクトガイド」(学研)によれば、第二次神武特別攻撃隊として、シンガポールに行き、そこを拠点として戦う予定であつたようである。しかし今にして想えば、出撃行中止は、多数の人命を救つた賢明な策だつたのでは。二回目の出撃行も二回とも中止になつたことについて、何か複雑な思いがあり、何か申しわけがないという気持ちだが、強くあつたが、これも運命であつたとしか考えようがなかった。私は自分に向かつて、再び生を与えられたのだと考え直して、これを善意に解釈して、その後もあの超酷寒の呉湾や瀬戸内海で、機銃操作訓練により、強固な意志、体力を培つた。葛城乗艦八か月間の生活は、わが青春の人生にとっては、極めて重く、貴重な懐旧談でもある。心身共にその後の生活を勇気づけられ、励みともなり、少々のことではへこたれない

人間になったと考える。戦争には負けたが、それは上層部のことであり、我ら下級兵は強かったと思い、そう言いたい。今に想えば、その当時、出撃行もままならぬ状勢となり、攻めより守りに転じ、葛城でも要員を残して、退艦していく兵士が多くなり、搭乗する飛行兵もうんと減って、飛行甲板で発着訓練をする轟音も、ほとんどなくなっていた。

同年五月初旬頃であったと思うが、我らも陸上勤務となり、退艦して、我ら兵長数名が三十余名の兵をひきいて、東海道線を横浜へ向かい、商船乗組を養成する「横浜船舶警戒総司令部」（山下公園近く、神奈川県庁の隣り、元生糸検査所跡）へ着任し、私は履歴書係として、終戦を迎えたのであった。退艦後、呉には六月二十二日、七月二十四日、二十八日と、空襲があり、被害が大きかったようであるが、唯一の航海できる輸送艦として、南海各島から復員する兵士を乗せて、何回かその重要な任務を果たしたのは、衆知の事実である。有名な藤山一郎もその中の一人で、8回航海し、四万九千余名の復員兵を乗せて、帰還した功績は称賛に値する。

私は戦後復員して、四十年の小学校教育に携わり、米寿を越えたが、葛城時代の出撃行という重みのある二回の言葉と、呉駅頭で十時間も待っていた父母の高い無言の教訓を原点として、戦後六十余年経過し感謝して、現在があると痛感している。戦争には負けたけれども、とことんまで行かなかったから、良かったのでは。もし勝っていたら、あの高慢な為政者のために、世界のひんしゆくを買い、我が国は悪しき方向に向かっていたと思う。民主主義になって良かったのである。今や老境にはいり、卒寿へと意欲づいているが、あの高き父母の恩に報いてきただろうか。いや決して、誇れる自分ではない。不充分であったと、後悔先に立たず反省している昨今である。「逝きて知る親の恩」とか、今は往時の呉市、呉湾、瀬戸内海、呉駅頭の父母、空母葛城、擬装して戦った呉大空襲と、多くの戦没者の霊を偲び、日夜戦友や父母に合掌している毎日である。